

教員養成課程学生における教員志望度の縦断的变化 —教員志望度の変化はなぜ生じるのか?—

○佐宗 駿 (東京大学大学院)

犬塚美輪 (東京学芸大学)

キーワード：教員志望度，教師効力感，教員資質能力自己評価

問題と目的

近年，教員不足の状況が続いており，問題視されている(文部科学省初等中等教育局, 2018)。そこで本研究では，教員養成課程学生の教員になろうとする意志の度合い(以下，教員志望度)がどのように変化するかを縦断的に検討するとともに，その変化に影響する要因を探索的に検討する。具体的には，1. 縦断的には教員志望度は低下する，2. 教師としてやっていける自信(以下，教師効力感)が教員志望度に影響する，3. 教員としての資質を有していると本人が感じる程度(以下，教員資質能力自己評価)及び教員を目指す理由(以下，教員志望動機)が教師効力感に影響するという 3 つの仮説を検討する。

方 法

調査対象者 東京学芸大学 2015 年入学者中，教員免許状の取得が必須の学科に在籍する 897 名。

質問紙尺度 大学独自作成の項目である教員志望度尺度(1 項目)，児玉(2014)の教師効力感尺度(9 項目)，藤井(2011)の教員資質能力自己評価尺度のうち一部を除外した 22 項目，さらに，教員志望度尺度において教員を志望した者に対しては，春原(2011)をもとに一部修正し作成した教員志望動機尺度(22 項目)を用いた。

調査協力 本研究のデータは東京学芸大学 IR センターが HATO プロジェクトの一環として行っている新入生・大学生学習調査の結果を用いた。

結果と考察

1. 教員志望度の縦断的变化 まず，学年(1~4 年)を独立変数，教員志望度の尺度得点を従属変数として一要因分散分析，多重比較を行った。その結果，Figure 1 のように教員志望度は有意に減少し続け，特に 1 年次と 4 年次に大きな効果量が認められた($g=.832$)。よって，教員志望度が縦断的に低下していくことが支持された。

2. 教師効力感から教員志望度への影響 次に，教師効力感の各下位因子を説明変数，教員志望度の尺度得点を目的変数として，各学年で共分散構造分析を行ったが，適合度の高いモデルは得られなかった。教員志望度変化のクラス分析によって得られた群別に教師効力感の下位尺度を独立変数，教員志望度を従属変数とする重回帰分析を用い再度検討した。その結果，「志望度激減」群でのみ，教師効力感の「学級経営」尺度(「問題のある子

どもに，クラス全体をめちゃくちゃにさせないように指導すること」などの 3 項目にどの程度自信があるか)から教員志望度への正の影響($\beta^*=.46, p<.001$)がみられた。よって，「志望度激減群」においては 3 年次から 4 年次の志望度の減少の抑制に，学級経営への自信を高めることが有効であることが支持された。

3. 教師効力感を高める要因 2~4 年次において教員資質能力自己評価尺度，教員志望動機尺度の各下位因子を説明変数，教師効力感の各因子を従属変数とした共分散構造分析を年次ごとにそれぞれ行った。その結果，2~4 年次の全時点で「集団討論能力」因子(「人とディスカッションするのは得意でない」「人の前で話をする時，緊張しやすい」などの 4 項目)から教師効力感の全ての下位因子への正の影響が認められた(標準化パス係数は .279~.457)。これは，集団討論能力があると考えられる学生はクラスの統制ができると感じるからだと考えられる。よって，集団討論能力への自己評価を高めることが教師としての自信に繋がることが示唆された。また，教員志望動機尺度の下位因子である「子ども志向」因子(「いろんな子どもと出会う機会のある仕事が好きだから」「子どもと接する仕事に就きたいから」の 2 項目)から「子ども理解・関係形成」因子(「子どもの気持ちや考えを理解すること」などの 3 項目にどの程度自信があるか)への正の影響が見られた(標準化パス係数は .253~.345)。これにより，子どもと関わりたいという理由で教員になった者ほど，子どもと関わることに自信を持つことが示唆された。

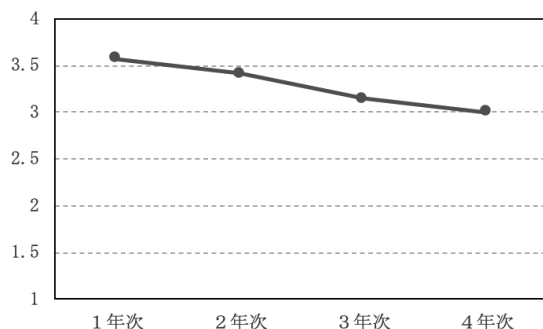


Figure 1 教員志望度尺度得点の変化